

新刊紹介

ハワード・スティーヴン・フリードマン 著 南沢篤花 訳
『命に〈価格〉をつけられるのか』
(慶応義塾大学出版会, 2021年)

蓋 若琰*

本書は「命の価格」という意味深い課題に関するものである。哲学的な視点から、人間の命に価格をつけるそのものが問題視されるが、命に対する値付けは現実の生活では避けられなく、人々は意識しないうちに命の価値の計算あるいは評価の影響を受けている。著者は、命におく価値で私たちは何を意味しているのか、命の価値はどのように評価するのか、それぞれの方法の限界は何なのか、命につけられた「値札」はどのような影響があるのか、意思決定でどのように公平と正義を守るのかという、日常生活から政策までの意思決定にかかわる肝心な問いを多くの具体例を挙げて詳しく説明し、命の値付けにかかわる考え方、価値観、問題点等を議論した。

第1章「お金か命か」は総説である。著者は冒頭において、高額な費用のため最新の薬物治療を拒否した患者がノーベル賞受賞者か殺人犯か、あるいは金持ちのCEOか高校中退の落ちこぼれかによって問題意識が異なりがちであるなどの事例から、「命の価格」の課題を提起し、(1) 命には日常的に値札がつけられていること、(2) こうした値札が私たちの命に予期せぬ重大な結果をもたらすこと、(3) こうした値札のおおくは透明で公平でもないこと、(4) 過小評価された命は保護されなのまま、高く評価された命よりリスクに晒されやすくなるため、公平性の欠如が問題である、と本書の論点を明らかにした。要するに、この命の値札は、単に金銭的な意味よりも広い意味を持っていて、その解釈は金銭で表現される値打ちのほか

に、有用度や重要度の意味合いもあるため、価値判断と意思決定の尺度となる。時間やお金をどのように使うかという日常の決断、戦争に突入するか、平和的解決を模索するかなどの政治的判断、刑罰や民事訴訟における賠償最低額の決定、生命保険の支出、さらに教育投資や中絶の決断など、個人レベルの行動と社会が行う決定を左右する。したがって、本書の目的は、命の価値評価のさまざまな方法をわかりやすく紹介し、関連議論と意思決定の風土をより広く醸成するために知識を共有することである。

第2章～第9章では、さまざまな事例から命の価値の評価方法とそれぞれの問題点を紹介した。9.11同時多発テロ事件の補償金の公平性の問題(第2章)、司法・裁判における命の価値の決まり方(第3章)、環境、労働、安全などにかかわる規制政策に応用された費用便益分析の限界(第4章)、企業の意思決定に用いた費用便益分析と報酬の決まり方(第5章)、生命保険(第6章)と医療保険(第7章)における健康と命の価格の決まり方、出産と子育て支援にかかわる費用と便益、また妊娠中絶や男女産み分けから生じた問題点(第8章)、さらに、命にかかわる価値判断を及ぼす不合理な決断がしばしばあるという人間の本质(第9章)をめぐる著者の議論と識見から、人々に大きな影響を及ぼす意思決定が必ずしも公平であると限らなく、命に異なる値札をつけていると示された。統計的生命価値など既存の命の値段を推計する方法はいずれも限界があるため、結果の解釈では推計の不

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長

確実性と限界を考慮しなければならず、また意思決定の際に医療経済評価を単一の材料でなく、複数の検討材料の1つとして利用する方法もある。最後に、命の価値の推計には不公平があるものの、人権と正義を守ってできる限り不公平を減らす努力をしていかなければならず、このプロセスに科学的な批判が不可欠である（第10章）。

著者に示されたように、命の値付けは人々の健康、権利、安全、経済力、寿命に大きな影響を及

ぼす意思決定に不可欠な課題である。そういう意味では、医療経済の考え方と命の価値にかかわる議論を小さな専門家会議に限らなく、一般の国民に共有しなければならない。また、国民の価値観は評価手法と意思決定に十分に反映するものである。本書は日本の医療と社会保障政策にも参考する価値が大きく、お薦めの一冊である。

(がい・じゃくえん)